

「標識と言葉」 (三年下四単元)

― 教材研究のかたすみで ―



北九州市立曾根東小学校教諭 城戸 祥次

一 一つの標識から

あれは、たしか北海道の阿寒湖付近をレンタカーで旅している途中のことです。若干の上り勾配のある果てしなく長い一直線の道路を快走していると、道路の脇に立っている標識が目飛び込んできました。黄色くて、正方形を傾けた菱形のいわゆる「警戒標識」です。



識探しをするにしても、標識作りをしていくにしても、そうした側面を教師が意識して指導にあたることは大切なことだと思います。

二 標識が伝えるもの

標識には、次のような特性があると考えます。

- ①「だれに」「なにを」伝えたいのかが明確であること。
- ② 個性的で、わかりやすくシンプルなマークであること。
- ③ 必要最低限の数量・内容であること。

以上三点をあげてみますと、いうまでもないことです。が、文字言語や音声言語での「伝える」とことびったり重なります。

①は、はっきりとした目的をもって伝えるということになりますし(相手意識・目的意識)、②は、わかりやすく伝えること(相手意識・その方法)、③は、その分量ということになります。

「だれに」「なにを」「どのように」伝えるか、伝えていくかを文字でも音声でもないシンボリックな「図形の言語」を通して学び取らせる学習展開を工夫していくことで、子どもたちに相手意識や目的意識について、改めてつかませたいものです。そして、相手意識や目的意識をもって活動することを「話すこと・聞くこと」や「書

その標識には鹿の絵が描かれていて、その標識に、思わず親子でわき上がりました。「野生の鹿が棲んでいるんだね。」「見てみたいなあ。」「鹿が飛び出したら危ないから、スピードを落としてね。」「こんな会話で盛り上がったっている最中に、ぬつと草陰から大きな角をたくわえた鹿が顔を出したのが今でも忘れられません。

九州に住む私にとっては、鹿が描かれた警戒標識は実に新鮮で、以前オーストラリアで見たカンガルーが描かれた標識ともども、その地を懐かしむ思い出の一コマとして残っています。味気のない高速道路を走行していて、タヌキの図柄の警戒標識(九州では結構見かけます)を見るたびに、そうした過去に出会った標識と重ね、会話がはずみます。こういう経験をした方はきっと多いことでしょう。日本だけでも、「イノシシ注意」、「ウシ注意」、「トラクター注意」、なかには「カニ注意」の標識まであるとか。

もともとそこを通行する人に、瞬時に注意を促したり、そこにあるものを知らせたりする目的で作られたものが道路標識ですが、ちょっと角度を変えると、その土地の様子や特徴、それを作った人の思いや願いまで浮かび上がってきて、さまざまなことが見えてきます。

三年下四単元「標識と言葉」の中で、子どもたちが標

識「こと」にも結び付けていくようにしたいと思います。

三 再考、標識が伝えるもの

きまりや、それを記した標識は、社会生活を営んでいくために欠かせないものです。また、三年の社会科で学習する地図記号や、公衆電話や男女別のトイレの表示など、そこに何があるかを示したマークも大変便利なものです。

しかし、ちょっと立ち止まって考えてみたいことがらや課題もあります。

その一つが、肯定よりも否定の方が発想しやすいということです。

例えば、標識作りの際、現状や問題点に「赤斜線」を入れれば、一つの標識のできあがりです。もちろん、改めて教室のルールを見直す意味で、そうした標識も必要かもしれません。しかし、必要最低限のルールのもとで社会生活を行っている教室で、短絡的に生活の細部にわたり、自分たちの手でこれもダメ、あれもダメにしている学習活動には、疑問符をつけたくなります。

作られた標識が実際に活用されなければ、活動が集結したとはいえません。大げさな話ですが、子どもたちが作った大量の「赤斜線」の標識が教室環境として整然と

並ぶさまは、教室に息苦しささえ感じるように思うのです。作る側の思いや願いを込めて、よりプラス思考で標識を生み出させたいものです。

もう一つは、前述の③とかかわりますが、標識がより少なくなる社会を望むということです。

情報氾濫の世の中というか、一か所に数個の標識が立ち並ぶ場所は全国にも多いでしょう。最低限のルールやマナーを設ける必要のあるところに設置されていることとは思いますが、よくよく考えてみますと、なかには盛り込まれた暗黙の「制限区域」がかえって仇になることもあります。

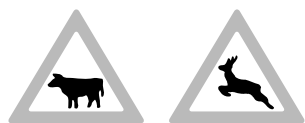
満員の乗り物の中で、お年寄りがつらそうに立っている前の座席で、十分に幅を取って携帯電話のメールに興じる若者の姿をよく見かけます。彼らはほとんどの場合、確かにシルバースhirt表示のない座席に座ってはいません。マナー標識がそこにあるということは、暗に、守るべきマナーの制限区域を設けているという考え方もできます。しかし、本来、制限区域内だからとか、その外だからという考え方はなく、相手を慮った行動がいつでもどこでもできることが、より気持ちのよい社会をつくっていくのではないのでしょうか。

そう考えていけば、あちこちに貼られた禁煙標識や、

病院などの玄関にやたらと目につく駐車禁止標識も、個々の良心に期待することによって、ある程度は無くしていけそうです。

そのようなことまで、本単元で三年生に要求する必要はないことかもしれません。ただ、教師として、こうしたことに敏感でありたいと思います。価値観の多様化、うんざりするほど悲しい事件が多発するなかで、薄らぐ規範や「ひと」としてのあたたかい心。この単元を通して、そうしたことの一端にでも子どもたちが気づいてくれればとてもうれしいと思います。

※次ページの資料は、児童の興味・関心を高め、「標識っておもしろいなあ。」「その国の言葉がわからなくても、これなら通じるね。」といったつぶやきにつながるよう、構成案を考えてみたものです。
単元の導入時や、第三次の「標識調べ」などで活用してみてはいかがでしょうか。



デンマーク



オーストラリア



日本

世界の標識
もっと調べて
みたいな

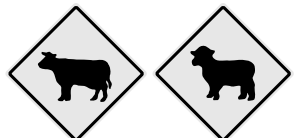
世界の「動物注意」警戒標識

種類や数量でその国の様子がかいま見える



アメリカ合衆国

アメリカにはたくさん
あるね。なぜだろう。



「動物注意」がひとつも
ない国ってあるのかな。



スウェーデン



ルーマニア



イギリス



ドイツ

引用参考資料「あったらいいねこんな標識」
<http://www.kictec.co.jp/inpaku/index.htm>